

特集 ■ 脳卒中急性期治療の最前線

脳卒中はわが国の死因の3番目であったが、急性期の治療の進歩により一命を取りとめることが可能となり、最近の統計では死因の4番目となっている。しかしながら生命的予後が改善された一方、障害を残し介護を必要とする患者が増えていることは周知の通りであり、その急性期からのリハビリテーションがますます重要視されるようになってきている。脳卒中治療に関しては、2009年版のガイドラインが出ているが、既に4年経過しており、その間目覚ましい勢いで進歩し続けている。

このような背景をふまえ、今回の特集では、リハビリテーションの現場で働く医師をはじめとする各スタッフが、脳卒中急性期治療における各分野の最新の状況を把握することを目的として企画し、それぞれの専門家にわかりやすい解説をお願いした。

■脳梗塞の治療

超急性期血栓溶解療法 (船津世絵良氏ら, 1089 頁)

2012年8月より4.5時間以内と治療可能時間が延長となった、超急性期の血栓溶解療法であるrt-PA (アルテプラゼ) 静注について、適応、除外項目など、その概要が述べられている。さらに筆者らの施設での使用の実際、合併症とその管理についても言及されている。

rt-PA 静注以外の薬物療法 (船津世絵良氏ら, 1095 頁)

ラクナ脳梗塞、アテローム血栓性脳梗塞、心原性脳塞栓症などにつき、rt-PA 以外の薬物療法について、世界での使用傾向と比較しながらわが国での現状が概説されている。脳保護剤、抗浮腫療法についても言及されている。

■高血圧性脳出血の治療

保存的療法 (伊藤義彰氏, 1099 頁)

まず脳出血の原因、病態、検査がわかりやすく概説されているが、特にアテローム血栓症増加に伴う抗血栓薬使用の副作用としての脳出血が増えていることが注目される。保存的治療に関しては、血圧の管理が重要であるが厳格な降圧の副作用に注意が必要であること、本邦でのニカルジピンの取り扱いが大きく変わったことなどが述べられている。

手術的加療 (小守林靖一氏ら, 1107 頁)

外科的治療の目的は、血腫による周囲脳への圧迫を軽減し、二次的脳損傷を防止することおよび軽減することである。血腫除去術、内視鏡的血腫吸引術、脳室ドレナージについて手術適応などの概説がなされるとともに、合併症および手術中の留意点についても触れられている。

■脳卒中急性期リハビリテーションの現状と課題 (高橋宣成氏ら, 1111 頁)

超早期からの離床については、安全性・効果に関してコンセンサスが得られているものの、急性期のリハビリテーションとして、何時から何を始めるかに関して必ずしも統一見解のないことが指摘されている。チーム医療における情報共有の重要性が述べられた後、筆者の病院での急性期リハビリテーション、地域リハビリテーションの現状が述べられている。

■Stroke care unit の現状と課題 (鈴木理恵子氏ら, 1119 頁)

SCU (stroke care unit) と SU (stroke unit) が混同されて使用されている現状を踏まえ、これらに関する過去の報告、現状と問題点、今後の課題が概説されている。欧米での現状が述べられるとともに、本邦での現状、筆者の勤務するセンターでの現状が紹介されている。

書 評

《標準理学療法学・作業療法学 専門基礎分野》生理学 第4版 (松波謙一) …1142 脳卒中機能評価・予後予測マニュアル (市橋則明) …1163

ニュース

「ノーマライゼーション・障害者の福祉」10月号特集目次…1106 介護ロボット利用希望 65%—内閣府…1110 手話言語条例を制定—鳥取県が全国で初めて…1118 沖縄県で障害者条例—離島の福祉充実も…1125 医療・福祉事務所、「腰痛予防策なし」44%—厚労省調査…1125

お知らせ

第16回日本褥瘡学会学術集会…1141 CRASEED アドホック講演会…1151 ADL 評価法 FIM 講習会 (西日本公式第11回)…1162 第39回日本リハビリテーション工学協会 車いす SIG 講習会 in 甲府…1162